

『らんまん』牧野富太郎

－始まりは、岸和田ゆかりの名著だった！－講演会まとめ

令和5年2月26日(日)岸和田市立図書館本館にて、郷土史研究家の万代博史氏による『らんまん』牧野富太郎－始まりは、岸和田ゆかりの名著だった！－を開催いたしました。参加者40名は、丁寧に詳細な話にメモをとりながら聞き入っていました。

まず、二大名著『本朝食鑑』『重訂本草綱目啓蒙』については、その来歴、内容・特色を図版の映像などを交えながらの分かりやすい説明がありました。

次に、二大名著と岸和田藩の関りについては、『本朝食鑑』は、三代藩主岡部長泰が、『重訂本草綱目啓蒙』においては、第11代藩主岡部長愼が、それぞれに自らの病弱な幼少期や、年を重ねて病を得たことなどにより、これらの書籍の必要性をより深くし、資金を援助して出版に至ったとのことでした。100年の時を経て思いを同じくし、有益な書物を後世に伝えるために尽力した岸和田藩に、アンケートでも「嬉しい」との声が多く寄せられました。

ここから、牧野富太郎の話へと続きます。高知の裕福な商家の生まれて、小学校中退という学歴が有名ですが、それ以前に洋学や漢学を学んでおり授業を退屈に感じてのことだったようです。そこから野山を巡り植物採集に明け暮れ、植物学を極める道のりの始まりです。植物の実際の知識はあるが名前を知らない富太郎少年は、近所の医師宅で『本草綱目啓蒙』と出会います。知人から『重訂本草綱目啓蒙』の存在を知らされ、ついに手に入れます。常に傍らにあって情報を提供し続け、牧野植物学の基礎を形作ったのが『重訂本草綱目啓蒙』であり、本の出版が途絶えようとしたときに手を差し伸べて出版にこぎつけたのが岸和田藩であったということです。また、小学校時代の唯一の楽しみは、学校に届いた「植物画」を見ることで、それは岸和田藩絵師、服部雪斎によるものでした。

欲しい書物のため借金が嵩み、また常識を逸した言動もあり、牧野富太郎の生涯は波乱万丈でしたが、最後に、これぞ「植物学の父」と思わせるエピソードを紹介いただきました。

「雑草という名の植物はない」～牧野記念庭園記念館が生誕160年のイベントで学芸員による「博士自身の言葉と考えていい」とする見解を発表しました。根拠となったのは作家、山本周五郎が残した言葉でした。雑誌の企画で牧野博士にインタビューした際、周五郎が「雑草」という言葉を口走り、「きみ、世の中

に雑草という草は無い。どんな草にだって、ちゃんと名前がついている。」となるような口調であったとのこと。 (木村 久邇典著『周五郎に生き方を学ぶ』より) この名言は昭和天皇のお言葉としても知られています。植物の分類研究をライフワークとしていた天皇は牧野博士から直接教えを受けられており、「植物を愛する二人にそれぞれ同様の思いがあり、雑草の名言につながったのではないか」と分析している (「高知新聞」令和4年8月18日記事より)

「一生を通じて野山を駆け巡り、草木の名前を求め続けた牧野富太郎にふさわしい言葉ではないかと思います」万代氏の締めくくりの言葉に胸が熱くなりこれから放送される NHK 連続テレビ小説「らんまん」への期待がふくらむ実り多い講演会になりました。